

算命学中庸

【初年】 2 回目

2 回目の授業はこのページからです。

授業科目 【三つの礎】 その(1)十二支

【初年】 2 回目 【三つの礎】 その(1) 十二支 01

➡ その(1)十二支

三つの礎 (みっつのいしずえ) (1) 十二支 (2) 五行説 (3) 陰陽論

(1) 十二支 (じゅうにし)

(2) 五行説 (ごぎょうせつ)

(3) 陰陽論 (おんようろん)

これら 3 つの礎^{ことわり}は、

算命学すべての技法の土台に

なります。

これから先——実践的な占いの^{ぎほう}技法が出てきますけど、
どれほど高度な技法でも、これから説明する三つの^{ことわり}理
を基盤にして構築されています。

⇒ それでは【三つの^{いしずえ}礎】の成り立ちをご説明します。

(1) 十二支 (じゅうにし)

十二支は、暦 (こよみ) の成り立ちと関係しています。

〔たとえば〕子年 (ねずみどし) 生まれとか、丑年 (うしどし) 生まれだとか、寅年 (とらどし) 生まれとか、私たちはこのように十二支をつかっています。

十二支は中国で4千年ほど前に生まれたものだといわれています。

暦 (こよみ) が最初からあったわけではありません。

およそ、四千年ほど前、古代中国の時代において、文明が発達して行く過程で、どうしても^{こよみ}暦を作る必要性が出て来たわけです。

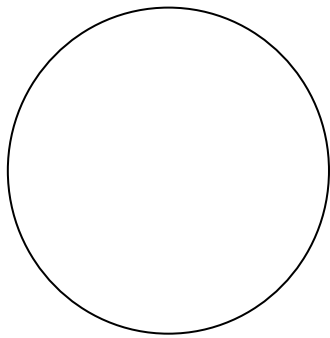
人間社会の文化レベルがあがってくれば、当然、どの国でも^{こよみ}暦が必要になります。

古代中国でもおなじでした。

当時の中国人が、暦を作ろうと考えたときに、まず始めに問題になったのは、1年を何ヶ月にしたらよいのか……ということだったそうです。

宿命(1) 円盤

この円を一周すると一年だと思ってください。



まだ暦がない中国の人間社会は、一年が12ヶ月と決まっていない時代でした。

1年は12ヶ月というのは、私たちが生まれたときからそのように決まっていますので、ごく自然につかっています。

その決まりすら、無い時代がありました。

もともと
元々1年は12ヶ月と決まっていたわけではありません。それで暦(こよみ)を作成するときに、一番頭を悩ましたのが、1年をいったい何ヶ月にすればよいのか……ということだったそうです。

当時において、1年が12ヶ月という決まりは無かったので、1年を10個に分けて、1年を10ヶ月としても、かまわなかったのです。1年を5ヶ月というふうに決めて、1年を5つに分けてもよかったかも知れません。

それでは1年を何ヶ月にしたらよいのだろうか……ということを考えましたとき、当時の中国に自然思想という考え方がありました。

そこで賢人たちが考えたのは、「**自然の法則に沿って1年を分けるべきである**」ということだったそうです。

1年を10ヶ月と分けたほうが、もしかすると判りやすかったかも知れません。

人間が勝手に1年を10ヶ月とか、1年を20ヶ月にしたとしても、それが自然の法則に即^{そく}したものでなければ、こよみ暦としての意味がないと考えたわけです。

そこで……人間も自然の産物のひとつなのだからという自然思想の考え方をもとにして『人間がつかう暦は、自然の法則に沿って、1年を分けるべきである』このような考えに至ったわけです。

1年を何ヶ月にしたらよいのか……？

このことは、昔の人にとってきわめて困難な作業だったと思えますが、自然の法則に沿って1年を分けてみようということになり、自然の法則をいろいろ調べました。

⇒ 自然の法則に即してといっても、幾多の ^{おもむき} 趣 と ^{いとな} 営みが自然のなかにあります。

なんとも不可思議な自然現象を観察するなかで、まずは夜空の星の動きに注目したのです。

夜空に輝く星々も、自然界の一員です。



まず星の観測をしました

星を観測しましたところ、木星という星を発見しました。



木星を発見したら、それが約12年周期で運動しているということが判明したわけです。

木星はとても明るい恒星で、夜になるとはっきり見えます。(東京ではどうかわかりません)

夜空に輝いている星のなかで、一番明るい星を見つけたら木星だと思ってもよい。といわれるくらいです。

ほかのどの恒星^{こうせい}よりも明るいのが木星です。

木星より明るいのは、金星くらいだそうです。金星はたまにしか観えないとのこと。

恒星（天球上で相互の位置をほとんど変えず、太陽と同じく自ら発光する天体）

木星を観察しましたところ、大体12年^{ごと}毎に、おなじ場所に戻ってくるということがわかりました。

現代^{いま}は、木星はほぼ12年で太陽の周りを一周している。ということは解明されていますが、当時の人たちはわからなかったでしょう。

……ほかの星はそういう動きをしないのに、木星だけがほかの惑星とは違う方向に移動して行って、12年経つと、またおなじ場所に戻ってくる。ということがわかりました。

[たとえば] 北斗七星ほくとしちせいという星は柄杓型ひしゃくがたに七つ並んでいま
す。この七つの星は何年た経っても、何十年けいか経過しても、
形状は変わらないし、その場所も変わらないそうです。

ところが木星はどうでしょう…… **宿命(2) 木星のうごき**

今日



木星は、今日ここに輝いていたかとおもえば、

翌日



つぎの日になると、場所が少し移動して……

翌々日



またつぎの日になると、少し移動して……

よくよくじつ
翌々日の場所に来るのです。

木星は、一日、一日ごとに場所が移動しまして、これが
12年経ちますと、天空を一周して、またおなじ場所に
戻ってくるわけです。

そして、また12年経つと、おなじ場所で光り輝きます。
このような木星の動きを観察して、とても不思議に感じ
たことでしょう。

ほかの何千・何万という星の位置は変わらないのに——
なぜか、ひときわ明るい木星だけが、ほかの無数の星と

は違う方向へ移動して行き、12年経つとおなじ場所に戻ってくるのはなぜなのか……？

古代の人の感覚では『天が人間になにかを教えてくれているかの^{ごと}如く』とても神秘的に感じたことでしょう。

この木星の動き、12年周期がきっかけになって〔12〕という数字には、なにか重大な意味があるのでは……と考えるようになったのです。

☞ ここで間違った解釈をしてはいけないのは――。

木星が12年周期だったから、十二支になったわけではありません。木性の12周期の〔12〕という数字に注目するきっかけになったということです。

〔12〕という数字が、自然の法則をあらわすうえで、なにか大切な意味があるのではないだろうか――？ と注目するきっかけに過ぎません。

☞ さきほどの **宿命(1)円盤** では、

「この円を一周すると一年だとおもってください」とい
いしましたが、古代中国の賢人たちが^{けんじん}想いついた^{おも}ことは、

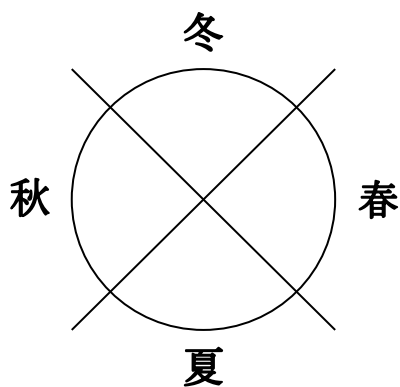
1年という周期のなかには、春夏秋冬という季節がある
ではないか、ということです。

大自然には四つの季節があります。

まずは、1年を春夏秋冬の四つの季節に分割するのが、
もっとも自然の法則に^そ沿っているのではなかろうか、と
考えたのです。

⇒ そこで、1年を春夏秋冬の四つに分けてみたのです。

宿命（3）春夏秋冬



春夏秋冬の四つに分割した。

大自然には春夏秋冬という四季がある。

それが大自然の流れで、大自然の法則

に^{かな}適った分け方ではないか、と考えて、
まずは1年を4つに分けたのです。

つぎに、当時の中国には「物事を『^{てん}天^ち地^{じん}人』の三つに
分けることが出来る」という考え方がありました。

「天地人」は、ものごとを三つに分けることができる。という考え方です。

このことについて、もう少し詳しく申しあげますと……
どのような事象にも『始まり・中心・終り』があるという
意味になります。

どんな物事も、始めと、中心と、終り、から成り立ち、
それらは全て「天^{てん}地^ち人^{じん}」の三つに分けることができる
という考え方です。

それに「天地人」という表現をもちいました。

〔たとえば〕太陽のうごきを考えますと……。

朝は東から昇ってきたら、お昼になれば天高く中心に来
ます。そして、必ず、夜になると西に沈んで行きます。
始まりはあるけれど、終りがないとか、中心はなかった
とか、そのようなことはあり得ないはずです。

〔たとえば〕人間の一生もそうです。

子供時代の初年期があって、大人になれば中年期があり、
年齢を経れば晩年期がやってきます。

人生も、初年期・中年期・晩年期という、三つの時代で
成立ちます。

〔人体図を三つの時代に分けます。人体図三分法で学びます〕

このように、全ての事象には、始めと、中心と、終わりが存在する。この考え方が当時の中国にありました。

なにかが始まると、だんだん強くなって、勢いが中心にきて、だんだん弱くなって、^{しゅうえん}終焉を迎えます。

⇒ 人間も赤ん坊として生まれます。

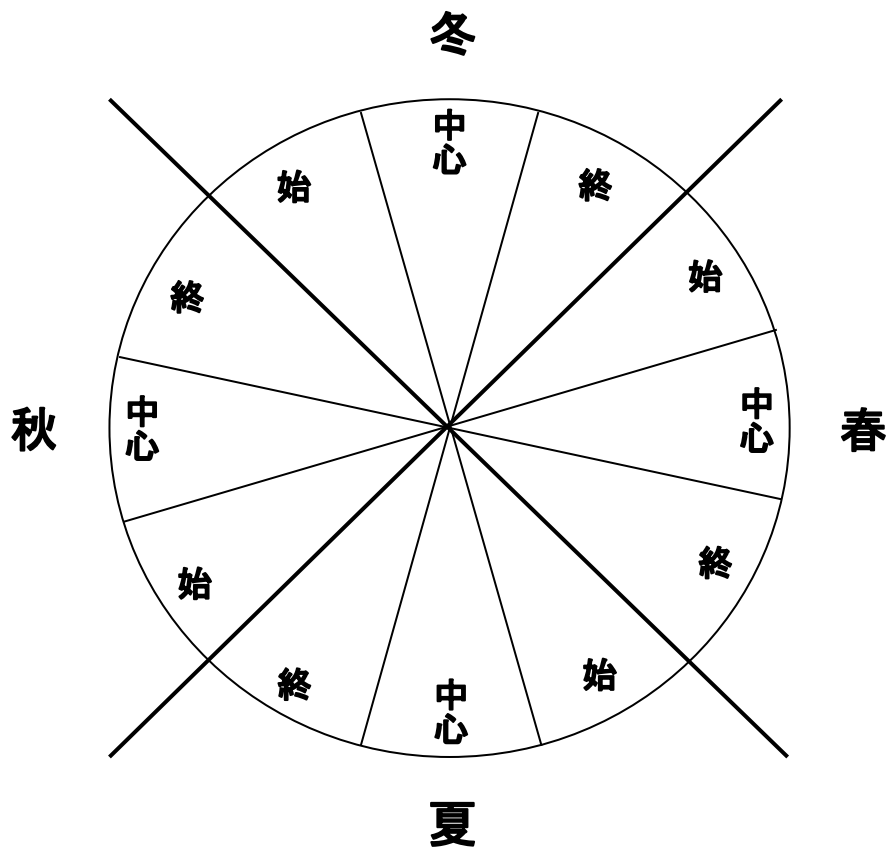
幼年期という人生が始まって、だんだんと成長していく過程で、肉体も精神も強く^{たくま}逞しくなって、人生の中心を迎えます。

その中心を過ぎると、チカラが衰える時代がやってきて、最後には弱くなって終わります。

ものごとの事象は、全てそのような^{すい}推移をたどるのではないか、という考え方を季節に当てはめてみたのです。

てんちじん
天地人

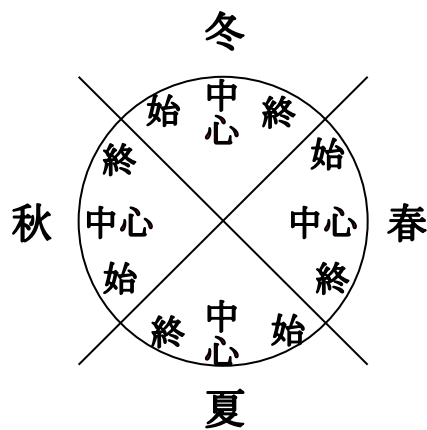
宿命(4) 天地人



この十二支盤の姿は、春・夏・秋・冬の各季節にも……
「始まりがあり」「中心があり」「終わりがあある」という
意味を示した図です。

天地人の考え方を季節に^あ当てはめました。

宿命(4) 天地人 を小さくしたのが **宿命(5) 十二支盤** です。



[たとえば] **宿命(5) 十二支盤** のように

冬という季節を三つに分割して、

「冬の始め・冬を中心・冬の終わり」と

いうふうに分けることができるので
はないだろうか、と考えたわけです。

そして、1年を12ヶ月に分けたのです。

⇒ 冬も始まったばかりの時期には、寒さが本番に達する前の季節があります。

冬も中心に来ると、最も冬らしい寒さの^{きび}厳しい冬を中心という時期があります。

冬も終わりのほうになれば、今度は、春が近づいてきますから、寒さが幾分ゆるんでくるという、三つの時期に分割することができるはずだと考えたわけです。

⇒ 春もおなじように三つに分けます。

春も始まったばかりのころは、まだまだ冬の寒さがかなり残っています。

春が中心にくると、最も春らしいぽかぽかとぬくもりのある季節感がめぐって来ます。

春も終わりのほうになると、今度は夏が近づいてくるので、かなり暑くなって来る時^じ季^きがまわって来ます。

春にも「春の始め・中心・終り」があると考えたのです。

夏もおなじように「始め・中心・終り」と分けました。

秋もおなじように「始め・中心・終り」と分けました。

このようにして、全ての季節を「始めと、中心と 終りに」分割したのです。

「1年が12ヶ月に分けられた」

たまたま、これが木星の12年周期とおなじ、「12」という数字であったわけです。

この方法で1年を12ヶ月に分割すると、それらの一つ一つが1ヶ月になるわけです。

そこで、1ヶ月の長さを測って見たところ、約30日になっていたので、1ヶ月を30日というふうに決めたところ、これが月の周期とほぼ一致していました。

1ヶ月（30日）⇒ 月の周期に一致した

これらのことは、「天 地 人」の考え方に沿って、季節を12分割したのが始まりです。

そして、1年を12ヶ月に分けて見ると、1ヶ月の長さは、約30日だったのです。

この姿は、月の周期とほぼ一致していたわけです。

☞ 月は、29.5日……くらいで、地球の周りを1周しているそうですが、当時の人達の感覚でいえば、月が新月で出てきて、だんだんと膨らんできて、満月になって、また欠けて行き、三日月になって消えていく……！

それまでが、約30日かかっていたわけです。

月は1年に約12回、3年に1回位は、13回の満ち欠けを繰り返すそうです。

季節を春夏秋冬に分けて、それぞれの季節に「天地人」の考え方を当てはめて、1年を12ヶ月に分けてみると、最初に見つけた木星の周期とも一致していました。

・木星の周期とも一致

木星は12年で天空を1周します。1年経つと……このくらい移動して、また1年経つとこのくらい移動してと

いうふうに、12年経つとまた元の場所に戻って来ます。
その周期を鑑かんがみますと、木星の12年周期とも一致して、
月の周期とも一致しました。

このような経緯けいゐがあつて、1年は12ヶ月に決まったの
です。

⇒ 私たちが暦こよみの12ヶ月を呼称するには、1月いちがつとか……
2月にがつとか、3月さんがつとか、いいあらわします。

ところが、昔の中国では、12ヶ月の区分をいいあらわす
ときに、とても難解な名称が、それぞれの月つきに付けられ
ていたのです。

当時は、文字認識などの教育が行き届いていません。
文字の読み書きをできない人たちが存在した時代があり
ました。

そうしますと、暦こよみとして民衆がつかうためには、ごくご
く身近な動物の名前を用いるほうが解わかりやすいです。
そのほうが、暦こよみとしてつかいやすいということで……
十二支が生まれたのです。

☞ **宿命（6）十二支盤** を見ると、おわかりになりますように、十二支と季節が配置されています。

十二支はご存知のように（子 丑 寅 卯 辰 巳 午 未 申 酉 戌 亥）

というように、12個の（支）があります。

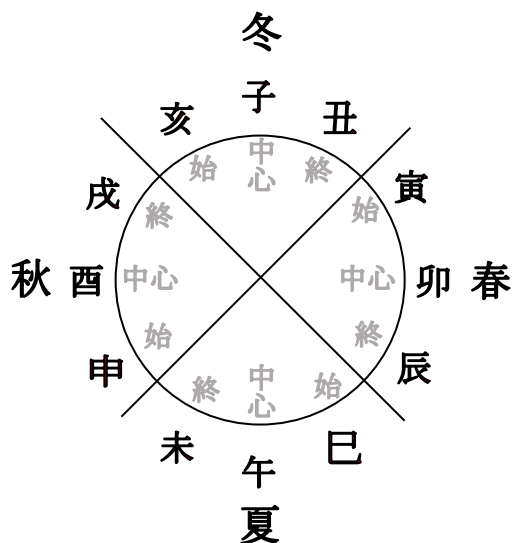
春の十二支は（寅卯辰）の3つです。

夏の十二支は（巳午未）の3つです。

秋の十二支は（申酉戌）の3つです。

冬の十二支は（亥子丑）の3つです。

宿命（6）十二支盤



実は、十二支は先ほどいいましたが、つかいやすく、おぼえやすいということから動物の名前を用いただけです。十二支の動物の名前は、単なる記号にすぎないのです。

当時の民衆がおぼえやすければ、花の名前でも、あるいは、虫の名前でも構わなかったわけです。

花であれば、ここは〔桜の月〕、ここは〔菊の月〕、ここは〔^{ばら}薔薇の月〕というのでも、構わなかったわけです。

（ネズミ）といえど誰でも知っています。

(ウシ) といえど誰でも知っていますので、身近な動物がいいだろう。ということで、動物の名前がつかわれただけなのです。

十二支自体は、単なる記号にすぎません。

十二支の性質と動物の名前とは、まったく無関係です。

十二支はその動物の性質とは、まったく関係ないので。

⇒ 民衆が覚えやすければ……仮に A. B. C. D でも構わなかったのです。

しかし、A. B. C. D という文字は中国にありません。

そこで、身近な動物の名前をつかったほうがよいということで、私たちが表現している十二支の名前になっただけです。

今でも、動物を元にして占うという、占いが存在していますけど、あれは全くの迷信です。

[たとえば]「あなたはネズミ^{どし}年だから、チョコチョコしている」とか、「ウシ年だからのろいのよ」とか、「トラだから強いね」と、いうようですが、まったくの迷信です。トラだから強いわけではないのです。

もしトラ（寅年）が強いのであれば、ウサギ年（卯年）は弱い人になってしまいます。

その根拠は……インドにも十二支が生まれたのですが、インドの十二支には〔象〕が入っています。

亥（いのしし）の代わりに、亥の場所に象が入っています。

インドの国に猪（十二支の亥）という動物はいません。象はとても身近な動物ですから、十二支のなかに入っています。つまり、猪でも、象でも構わないのです。

あるいは、十二支に猫がないのは「どうして……」という人もいます。

それは、当時の中国に、猫がいなかったのです。

今から四千年前のエジプトには猫がいました。

猫はエジプトが原産だそうです。当時、猫という動物はエジプトにしか生息していなかったそうです。

古代中国というのは、東洋に猫が伝わって来る前の時代のことです。（日本もおなじです）

中国に猫がいなかったので、十二支のなかには入っていないだけです。

中国で猫が身近な動物として飼われていれば、12ヶ月のどこかの月に、猫が十二支の1つとして入っていたかも知れませんね。

現在でこそ、パンダは人気ものですが、古代中国の時代にパンダが有名な動物であれば、パンダも十二支の一員として、入ったかも知れません。

パンダが生息していた地域の人たちは、パンダの存在を知っていたのでしょうけど、一般的に身近な動物ではないので、十二支のなかに入っていないのです。

……話しがわき道にそれました。元へもどります。

⇒ 自然界を観察することで、1年が12ヶ月と決まりました。

つぎの問題として、1年はいつから始まるのか……それを決めないことには、^{こよみ}暦とはいえません。

それは「1年はいつから始まるのか……」ということになります。

1年の始まりを決めるのは『春夏秋冬の移り変わりを調べていけば、わかるのではないか……？』という考えに

至ったのです。

この分け方は、春夏秋冬を四つに分割したことが、元になっています。

そうしますと、

『春』の自然界は、どういう現象が起こるのか？

『夏』になると、自然界はどのように変わるのか？

『秋』になって、葉の色に変化があらわれると、自然の姿はどのように転ずるのか……という季節の移り変わりを観察したのです。

……春の到来で、植物は芽吹いて、^{どんが}嫩芽は成長を始めます。土のなかでも^{うごめ}蠢きはじめます。

動物も冬眠から目覚めて活動をはじめます。

まるで、春の訪れと同時に、自然界の万物がいっせいに動きはじめて、^{やくどう}躍動するようになったわけです。

現在でも、もちろん、そう見えるとおもいます。

自然が活発に動きはじめる時期、それが1年の始まりではないだろうか、と考えたわけです。

1年の始まりは、自然界が活動をはじめる時期である。
それは春であり、春こそが1年の初めの季節である。
春が1年の始まりという結論に漕ぎ着けたのです。

私たちが季節の四季を言葉にするとき、「春夏秋冬」と
いいます。

「夏秋冬春」とか「夏秋冬春」とかの順番ではいいま
せん。

必ず……春 夏 秋 冬の順番でいうはずです。

このように、『春』から季節の名称を呼びはじめるという
のは、もともと、春が1年のはじまりだということが、
暦のうえで考えられていたからです。

この暦は日本にも古くから伝わって来ています。
日本においても『春 夏 秋 冬』という言い方をしている
のは、『春から1年が始まる』という考え方に基^{もと}づいてい
るからです。

⇒『春は1年の始まり』です。といたしました。

つぎの問題は「その春はいつから始まるのか」ということです。

春はいつから始まるのか……？

春というのは、正確に「何月何日から始まるのか」ということがわからなければ、正しい暦とはいえません。

もうすでに……春は始まっているのか？

春は始まっていないのか？

今週なのか？

はて、来週なのか？

このような不明確なことでは、暦になりません。

“春はいつから始まるのか” 決めなければなりません。

当時の人たちが、それをどのようにして決めたのかといえは、「太陽の動きによって、決まるのではないか……」と考えたのです。

春夏秋冬の季節が生まれるのは「太陽の動きによって、生まれるのではないか」と^{すいそく}推測したのです。

太陽の勢いが強くなると、陽射しが強くなってきます。
日照時間も長くなり、暑くなって夏が来ます。
太陽のチカラが弱くなり、日照時間も短くなって来ると
涼しい風が流れ ^{ただよ}漂い、秋の季節にはいります。
もっと太陽が弱くなれば、冬になります。

このような太陽の強弱の変化と、季節の関わりにおいて、
太陽の光が強くなりはじめると、春がくるという結論に
いたりしました。

それが正しければ、数年間、太陽の推移を観測すれば、
『春』のはじまりがいつなのか判明するのではないかと
考えて、太陽の観測をしたわけです。

太陽の観測をした

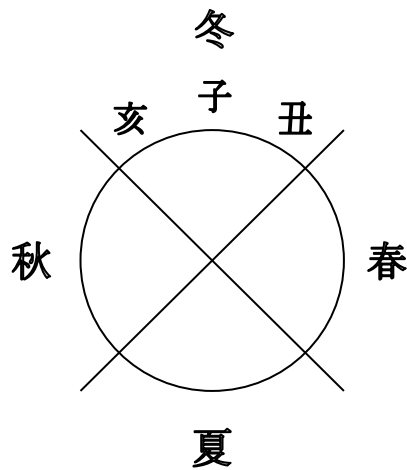


冬至・夏至・春分・秋分を発見した

そうしましたところ……まず冬至が発見されました。

冬至 (冬を中心)

12/22-23



6/21
夏至 (夏を中心)

宿命 (7) 冬至・夏至

つまり、1年中で昼が一番短い日が発見されました。

これが12月22～23日位です。

観察を続けて……毎年12月22日になると、太陽の力が最も弱くなるということが判ったのです。

冬至は日照時間も一番短く、太陽の日差しが最も弱い日です。

太陽が弱くなると、寒くなって冬が来ます。

それなら、太陽が最も弱い冬至のところは（冬を中心）になると決めたわけです。

冬至は冬の頂点に達する日という意味で、冬至と名づけられたわけです。

「冬至は冬が中心に至る」

冬の十二支は（亥^い 中心
子^ね 丑^{うし}）です。

冬の十二支は（亥^{いづき}月） 冬至
子^{ねづき}月（丑^{うしづき}月）と3ヶ月間続きます。

その中心のところ（子^{ねづき}月）に〔冬至〕が来るように暦は こよみ設定されています。

冬至から、ちょうど半年を経過した反対側……夏の中心
のところで、昼の一番長い日が発見されました。

この日は夏至^{げし}になるわけです。

大体6月21日頃です。

夏至^{げし}の日は、日照時間が一番長くて、日差しが最も強い
1日です。

太陽が最強となる日です。

太陽が強くなり、暑くなって夏になります。

太陽が最も強くなる1日〔夏至〕のところは（夏の中心）
の1日になると決めたのです。

夏至という言葉は「夏が^{いた}至る」と書きます。

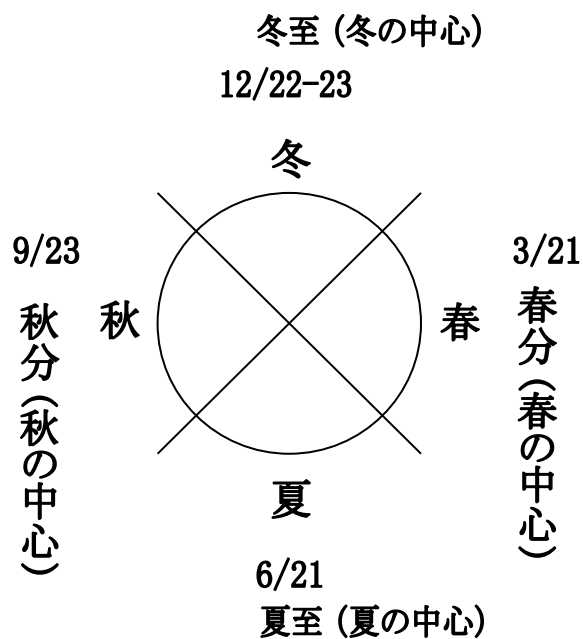
つまり、夏の頂点に至った（到達した）という意味で……

夏至と名づけられたわけです。

⇒ 春分しゅんぶんと秋分しゅうぶん

つぎに、冬至から夏至までは半年ありますが、冬至から夏至に至るまでの丁度・中間のところ、ここで昼と夜の長さがおなじになるところが、発見されました。

これが春分しゅんぶんの日になるわけです。3月21日頃です。



宿命 (8) 春分・秋分

しゅんぶん

春分しゅんぶんの日は昼の長さ、夜の長さがちょうどおなじです。

太陽が強くもないし、弱くもない、太陽のつよさが1年のなかで、もっとも平均している日だとして(春の中心)と定めたのです。

この反対側の秋分しゅうぶんの日も、ほぼ同時に発見されています。秋分が(秋の中心)です。

秋分の日は9月23日位です。

太陽の観測をして、それぞれの季節の中心がわかった。



冬至・夏至・春分・秋分を季節の中心と定めた。

参照 ⇒ 宿命(7) 冬至・夏至 宿命(8) 春分・秋分

冬ふゆの中心は太陽が最も弱くなる冬至とうじだとして、春はるの中心が春分しゅんぶんの日だとしたら、冬ふゆの中心と春はるの中心から数えて、ちょうど真ん中にぶつかるところが、冬と春の境目さかいめだということになるはずはずです。



冬至と春分しゅんぶんの中間点ちゅうかんてんは、冬と春の境目さかいめである

そこは参照 ⇒ 宿命(9) 節分

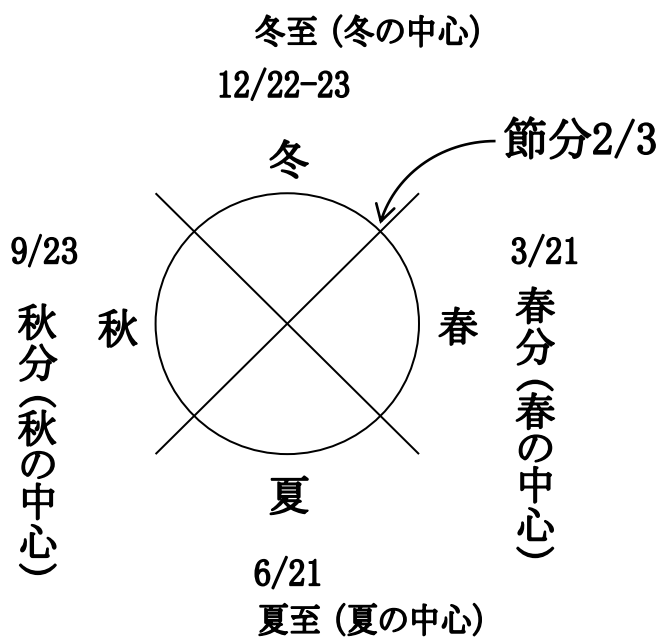
⇒ 春の中心と、冬の中心がわかりました。

そうしますと、それぞれの春の中心と冬の中心から数えてゆきまして、真ん中でぶつかる箇所が、冬と春の境目だということになります。

これは、日ひにちがわかっていますから、数えていけば出てきます。

数えてゆくと……だいたい2月3日になったわけです。

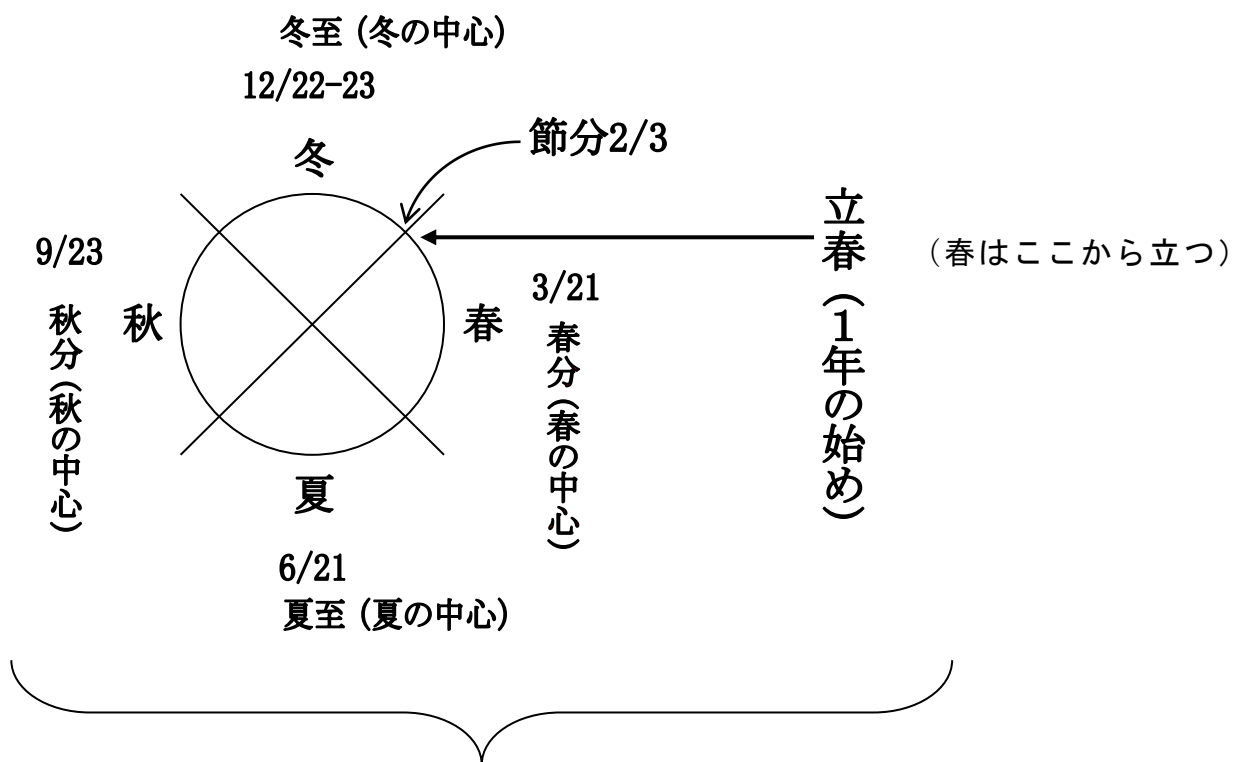
宿命 (9) 節分



冬至と春分のちょうど中間点の 2月3日 というのは……季節を分ける日だとして『節分』と名付けました。これが節分のはじまりです。

☞ 節分が季節の分れ目、冬と春の分かれ目だということのなら、つぎの日から春がはじまるとして、節分のつぎの日〔2月4日〕を^{リっしゅん}立春と名付けたのです。

宿命(10) 立春



これをもとにして、節分と立春が決まった

春はここから立つ日だとして“立春”と名付けまして、ここを **1年の始まる日** と決めたのです。

「立春は1年の始まる日です」このことは、ぜひとも覚えておいて頂きたいのです。

是非とも頭に入れておいてください。占いのうえでも必要です。

“立春”は、2月4日の場合がほとんどですけど、^{うるうどし} 閏年が来ると、2月5日になったりすることもあります。

それは毎年……冬至が何日なのか、夏至が何日なのか、その年によって違うからです。

地球は、まん丸い軌道を描いていません。楕円形の軌道で太陽の周囲をまわっています。

それゆえに、春分の日が3月21日になることもあれば、3月20日になることもあるわけです。

それによって、立春も1日ずれることがあります。

1日ずれる……それは「毎年、毎年、太陽の観測をしていて」節分はいつなのか、立春はいつなのか、ということを決めて決めていますので替わります。

☞ 「今年の立春は2月4日なのに、来年は2月5日だなんておかしいわ、古い^{こよみ} 暦だからいい加減では……」と、そのように考える現代人もいるようですね。

私たちがつかっている現代のカレンダーは^{せいようれき} 西洋暦です。

西洋暦カレンダーに書かれている〔1月1日〕という日、^ひ 日本では元旦があります。

そこで西洋暦の成り立ちを参考までに申しあげます。

なぜ……西洋歴が1月1日から、1年が始まるのかとい
えば、それは中世のヨーロッパにおいて、ローマ法王が
『12月25日のクリスマスの1週間後がよいのではない
のか』ということで、1月1日に決めたのだそうです。

12月25日のちょうど1週間後は、1月1日です。

『クリスマスのお祝いをして、それからチョットゆるり
と休んで、1週間位^た経ったほうがいいだろう』というこ
とで決まったそうです。

クリスマスが日曜日だと、1月1日も日曜日です。

クリスマスが土曜日だったら、1月1日も土曜日です。

このようにして、決めただけです。

そこには、1年の始まりは、なぜ〔1月1日〕なのかと
いう科学的な理由はないのです。

2月は、28日間しかありません。

「大の月」と「小の月」と、交互^{こうご}に来るということ自体、
当時のローマ法王が勝手に決めただけのことです。

それは西洋の星占いで、2月はあまり良い月ではないの
で、チョット減らしてしまおう……ということで、減ら
したのだそうです。

2月は28日間しかないということについての、科学的な理由はなく、自然の法則ありません。

3月は、31日間あります。

私たちがつかっている西洋のカレンダーは、非科学的な

^{こよみ}暦ということになるのでしょうか？ いかがでしょう。

⇒ 西洋暦のカレンダーよりも、古くからの中国の^{こよみ}暦のほうが、はるかに科学的な暦といえます。

なぜ！ 科学的といえるのでしょうか……？

それは太陽の動きによって、1年の始まる日を割り出しているからです。自然の法則を取り入れた暦なのです。

〔たとえば〕節分というのは、昔の大晦日に当たります。

2月4日が昔のお正月ですから、新年が来るので、豆をまいて、お清めをしていたわけです。

2月4日が1年の始まりというのは、日本も江戸時代までは、立春の^{あた}辺りを、お正月としていたのです。

天体の^{せつり}摂理を観察してつくられた^{こよみ}暦は、自然の法則自体を反映した科学的な暦といえるでしょう。

今でも香港や台湾では旧正月をやっていると思いますが、

旧正月はこの立春をお正月とした。この^{こよみ}暦のことです。

日本では、今でもお正月のことを「^{しんしゅん}新春」とか「^{はつはる}初春」とかといいます。

^{りっしゅん}立春がお正月ですから「お正月になれば春」ということで、新春あるいは、初春という言い方をしたわけです。

今のカレンダーの1月1日は、まだ真冬ですから——
新春とか、初春とかいうのはいかなものでしょう。
呼び方だけを、^{なごり}名残としてつかっているのです。

⇒ ここまでの話しのなかでは……、

「1年を12ヶ月に分けた成り立ち」

「立春が1年のはじまり」

ということを、ご理解いただければよろしいのです。

【初年】 2回目【三つの礎】 その(1)十二支 終わります

つぎの授業 ⇒ 【初年】 3回目【三つの礎】 その(2) ^{ごぎょうせつ}五行説